

特集 彦根のヴィスタ・ポイントを探せ！

「城と町」の景観を見直そう

彦根景観フォーラムは、彦根の景観の魅力を再評価し、まちづくりに生かす活動を推進しています。

景観は市民が共有する公共財であるとの考え方は、日本では比較的新しく、景観をよりよいものに改善していくという考え方も十分浸透しているとは言えません。

本特集では、景観とはなにか、そして彦根にとって大切にすべき景観とはなにかについて考えてみます。

「景観」ってなに？

景観とは、自然や都市の風景を見ることによって、人の心にうまれる視覚イメージをいいます。

ただ、人は目に映る物のすべてを等しく見ているわけではありません。見たいもの、見やすいものを重視して見えています。

見たいものとは、例えば大きな山や川、特徴ある建物や町なみなどのランドマークと呼ばれるもの、何の景観なのか手がかりを与えてくれるものです。

また、見やすいものとは、ほどよい大きさで見えるものです。ほどよい大きさとは、見込み角度が10度～20度の間に見える大きさで、東海道新幹線の車窓から見える富士山の大きさがちょうど20度です。

景観は、見る人の位置と対象との距離によって見え方が変わります。身近に一つの建物などを見る「近景」、連なった町なみなどを見る「中景」、山や町の全体を眺める「遠景」に区別できます。

良い景観とは、中景や遠景の場合、見たいものが見やすいことです。城や山などの見たいものが、他のビルや電柱などよりも相対的に大きく見え、また、電線など他のものに邪魔されない場合、よい景観と感じます。

近景の場合は、歩きやすい歩道、居心地の良い休憩スペース、店舗前の花や照明、のれんなど、私を大事



にしてくれる「おもてなし」の表現がある空間をよい景観と感じます。景観は、「自然」、「時間」、「デザイン」の



3つの要素で良さが評価されます。「自然」は、緑や水、生き物が与えてくれる魅力です。「時間」は、歴史の流れや季節、一日の時間の流れが作る魅力です。「デザイン」は、人間が創り出す物の形や色、周辺との調和によって生み出される魅力です。「自然」と「時間」にあわせた「デザイン」を施すことによって、これらの要素が全体としてバランスがとれて、良好な景観がはぐくまれていきます。

そして、景観から、歴史のある町、賑わいのある町、緑の多い町といった「地域らしさ」が浮き上がり、住む人に地域への誇りや愛着を感じさせてくれます。

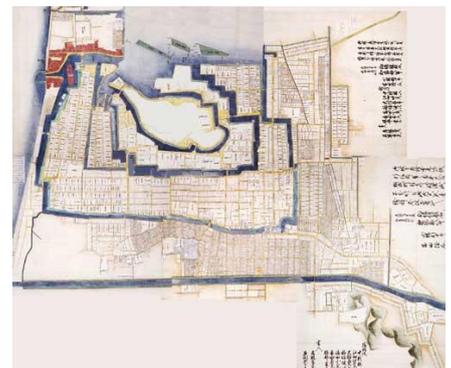
景観づくりは、単に道路を整備し歩道に美しく植栽することだけではありません。見る対象物と見る主体となる人間を関連付けて取り扱うことが大切であり、景観づくりは「景（もの）」と「観（人）」の両方を創っていくことです。さらには、人の心に刻まれる景観は、それを見る人、そこに住む人と一緒に創り育てていくことが理想なのです。

城と城下町の景観を見直す

彦根の都市景観の中心は、なんといっても彦根城です。城下町は、公権力を一元化した近世大名の視線が都市全体に貫徹するように計画された都市ということが出来ます。

宮本雅明氏（元九州大学教授）は、豊臣政権が作った長浜や近江八幡の城下町は、町割りの中心となる本町の通りから正面に天守が見通せるように町が計画された「縦町」であると指摘されています。

これに対し、彦根は、中山道から引き込んだ彦根道が城下町を横断し、道の両側に商家が立ち並ぶ「横町」で



あり、通りから公権力の象徴である天守や城郭を見通すことができません。そこで、彦根では、城が見とおせる地点に重点的な景観演出がされていると述べられています。

このような見通しのことを「ヴィスタ」と言います。ヴィスタは、一般に「眺望」と訳しますが、原義は両側を並木や山などで区切られた見通しであると言われています。宮本氏は、彦根城を見とおすことのできるヴィスタ・ポイントとして、城下町への出入口部分と水路上に注目しています。

では、宮本氏の手引きで、彦根の城と城下町のヴィスタ・ポイントを探してみましょう。

ヴィスタ・ポイント1：松縄手道（古沢町）

中山道の鳥居本宿から佐和山の切通しを越えると、松縄手道に入ります。この道は、幅約6.3mで、両側の土手に松が植えられ、正面に彦根城の着見櫓、その左隣りに天守が、空を背景に浮かぶように見通せ、通行する人に強い印象を与えたと思われま

す。着見櫓は、二重櫓に千鳥破風の装飾がされており、天守とともに見られることを意識した櫓でした。松縄手は、城下町の入口を示す重要な場所であり、藩主が江戸から国元に入るときには、松縄手で籠をおり、將軍から拝領した馬に騎乗して町に入り、切通口御門を経て、佐和口御門から城に入ったとされています。



現在、松縄手道にたつと、大きなマンションによって彦根城の眺望が切断されてしまい、辛うじて着見櫓の台を望むことができます。かつての松並木の沿道は住宅がぎっしりと建てられています。

切通しに至る道は国道八号線と交差し途切れていますが、そこに展望台がつけられていて、マンションが建つまでは彦根城の城郭全体が城下町の屋根群の上に見渡せたことでしょう。ここから松縄手道を下るにつれて、正面の彦根城郭が大きく見えてくるダイナミックな景観設計がされていたことが実感できます。



せっかくの展望台が、素晴らしいヴィスタを見せる機能を果たせなくなっているのは、本当に残念です。マンションが建て替わるときには、位置や高さを変更できる都市計画が望まれます。

ヴィスタ・ポイント2：切通口（いろは松前）

いろは松の東端の中堀に接した道路上から見た彦根城の景観は、城山の上の天守、左手に天秤櫓、かつては右手に着見櫓があり、麓に佐和口多聞櫓、そこから手前に中堀の水面が石垣と松林に左右を限られて伸びてくるといった典型的なヴィスタになっています。

この場所は、江戸期には切通口御門と外堀がありました。松縄手道から城下町内に入った彦根道は、外舟町で左に折れて彦根町を城郭と並行に進み、外堀を渡って切通口御門の枿形を抜け、佐和町、伝馬町（現在の中央町）から高宮口御門まで直線を進みました。

この切通口御門の前の外堀の土橋上から、外堀の水面と中堀の水面越しに、彦根城の天守や櫓を見通すことができました。これは、横町を通行する人々に城郭を見せるために計画的に外堀を配置し、景観が設計されたと考えられます。

現在は、外堀が埋められホテルが建っており、かつての景観を復元することは困難です。せめて、ホテル前から自動車の通行を気にしないで、安全に伝統的なヴィスタを楽しむ工夫が欲しいものです。（次頁へ）

